

忘れられない

南区支部 星 ヤスヨ（妻）

戦没者 星 徳衛

戦没地 南方アドミラルティ島

主人は、昭和十八年八月三十日暑い最中に出征しました。名誉の召集令状とか言われても、家族の心は穏やかではなく、顔で笑って心で泣いて見送ったものです。その時、私のお腹には新しい命が宿っておりました。主人の兄も、六年前からラバウルの最前線に従軍しており、主人は出発に際して「兄さんに逢いたくないあ」と一言ポツリと言ったことが、今でも私の心に強く残っております。「二軒から二人も出征させられるなんて・・・」と言う思いで一杯でした。働き盛りの男手のない、女、子供、老人の留守宅をしつかり守らねばと義姉と二人心を合わせて頑張る苦労の日々でした。幾つもの山林を持つていながら、義父一人ではどうにもならず、時々、山仕事を他人に頼んで木を切り出してもらい生活をしておりました。義姉と私も色々な下働き等をして生活の糧としておりました。新潟の冬は大雪が降ると屋根の雪降ろしは欠かすことは出来ません。屋根に上がると怖くて切なく、一段と高い土蔵の屋根では足もすくむほどで命がけの作業でした。日本の勝利を信じ、主人や義兄の帰る日を信じて待つのみでした。

しかし、二十年八月十五日、日本は敗戦で終戦を迎えることになります。口惜し涙と悲しく無念の涙が止まりませんでした。アメリカ兵が女、子供を殺すとかいろんなデマが飛び交いました。私は、唯、主人が無事に帰還することだけを祈り案じる日々でした。

しかし、八月三十日には、主人の戦死の公報を受け取りました。遺骨を受領に行くと、骨箱には、名前を書いた紙切れと爪だけが入っており、ただただ、骨箱を抱き涙が溢れるばかりでした。戦没者の家族は我家だけではない、と自分を自分で励まし頑張ろうと誓いました。義姉と共に、義兄の帰還を待っているところに、義兄が喜びの帰還をしました。

長い間の過酷な熱帯地域の食糧不足の戦場での従軍のため、栄養失調で痩せ細り骨と皮だけに見えるも無残な姿での帰還でした。その上、マラリアに感染しており、高熱にうなされ痙攣を起こすことも度々で、働くどころではありません。戦中にも勝る苦難の生活が長く続きました。

義父は、息子二人のうち、一人は戦死し、帰還した息子も、その変わり果てた姿に、心痛も重なり二年後に帰らぬ人となりました。その後の苦労は言い尽くせぬ程ありますが、二十八年間、義母と暮らして、その最後を看取りました。九十三歳でした。

昭和二十八年から公務扶助料を頂ける様になった時は本当に有り難く助かりました。

今、振り返ると、全てに耐えて乗り越えて来たことを思う時、平安の中に、息子の家族達と共に、横浜の地にて幸せに暮らせることを心より感謝しております。

世界には、今でも戦禍に苦しんでいる人々のいることを思う時、平和の訪れの日も早いことを祈ると共に、日本は二度と戦争は起こさない、参加しないことを固く誓い守ることを願ってや

みません。